

会話における「んだ+けど」についての一考察

李 徳 泳*・吉田章子**

キーワード: 話し言葉, 接続詞, 会話, 語用論

要 旨

「けど」は日本語の会話において最も頻繁に使われる表現の一つであるが、特に「んだ」と共起して「んだけど」の形で用いられる場合が多い(本研究のデータでは「けど節」全体の58%が「んだ+けど」)。これは、「んだ」と「けど」が組み合わせられることによってそれぞれの機能や特性が結合し、会話で頻繁に用いられる何らかの効果を生み出しているのにその理由があると考えられるのである。本研究の目的は、会話における「けど」の役割や「んだ」の特性を調べ、これらの結合のメカニズムを明らかにすることにある。

分析の結果をまとめると、まず、発話に「けど節」が主節(本稿では「関連要素」と一緒に現れた場合に、「けど節」は「前置き」または「補足」としての役割を果たすが、ここで「んだ+けど」の組み合わせは、聞き手の注意を喚起する働きを持つ。また、主節は現れず「けど節」が単独で使われた場合には、「んだ+けど」は、一方では話し手の気持ちを一通り表し、他方ではそれがあまり強く直線的にならないように抑える二重的な働きを持つ。この二重的な働きにより話し手は自分の気持ちや感情を過不足なく表すことができ、また聞き手の注意を喚起する働きにしても、主節における主メッセージを相手に理解してもらう上で重要である。このようにして「んだけど」の表現は、円滑なコミュニケーションを行う上で重要な戦略として好まれるのだと考えられる。

1. はじめに

すでに多くの研究によって指摘されていることだが(例えば、森田 1980, 岩澤 1985, 高橋 1993, 白川 1996), 一般に「対比」や「逆接」を表すとされている「けど」(「けれども」「けれど」「けども」を含む)の用法において、特に会話では「対比」や「逆接」として扱いにくい場合が多い。例えば次のような例である。

- (1) ミッドセメスターブレイクのあいだに旅行に行ったんだけど, そんなとき恐ろしい勢いで食べまくって... [会話2]

* LEE Duck-Young: オーストラリア国立大学日本センター助教授。

** YOSHIDA Akiko: オーストラリア国立大学日本センター大学院生。

(2) セントラル駅から黄色い線に乗るの。ウエスタンラインっていうんだけどね。[会話 4]

例(1)で、「けど」によってマークされる要素「ミッドセメスター～行ったんです」と、「けど」に接続される他の要素「そんなとき～食べまくって」との関係を「対比」または「逆接」と見なすことは難しい。他の例(2)についても同じことが言える。こういう背景から、会話での使用の方を中心に談話や語用の立場から「けど」の機能を見直そうとする研究が活発になされてきている(例えば、今尾 1994, Itani 1996, Mori 1996, Nakayama & Ichihashi-Nakayama 1997, Park 1997, など)。

ここで一つ興味深いのは、「けど」と「んだ」(「んです」を含む)との関係である。上の例にも見られるように、「けど節」において「けど」が「んだ」と一緒に使われる場合が多い。60分にわたる私たちのデータでも合計 125 の「けど節」が見られたが、そのうち、「けど」が述語の辞書形やタ形に直接続くもの(例: 行くけど, 高かったけど, など)は 52 例, 「んだ+けど」の形で述語に続くもの(例: 行くだけど, 高かったんだけど, など)は 73 例が観察された¹。つまり、「けど」が「んだ」と一緒に使われたのが約 58% にのぼることになるが、これは単に偶然と見なすにはあまりにも高い頻度で、「けど」の機能と「んだ」の持つ特性とが結合し会話で頻繁に用いられて何らかの効果を生み出していると考えられるのである。

会話における従来の「けど」の研究では、「のに」との相違に重点が置かれたり(例えば、今尾 1994, 渡部 1995), 他の言語の類似表現との比較に重点が置かれたり(例えば, Park 1997), あるいは主節なしに「けど節」だけで使われた場合というふうに研究範囲が限られたり(例えば, Ohori 1995, 内田 2001)するものが多く, 「けど」の会話における役割について総合的な考察が十分なされてきたとは言いがたい。特に, 上述した「んだ+けど」の使用に関して, 「んだけど」と, 「んだ」のない「けど」との違いを扱っているものはいくつかあるが(例えば, 野田 1995, など), その共起関係のメカニズムを解明する分析は皆無である。本稿の目的は, 「んだ+けど」の組み合わせに焦点を当て, 「けど」が会話を進めていく上でどのような役割を果たしどのような機能を持っているのか, また「んだ」の使用はどういう効果をもたらすのかを調べ, 「んだ」と「けど」との結合のメカニズムを明らかにすることにある。

¹ この観察は 6 ペアの日本人同士の会話(自由討論)に基づいている。会話に参加したのはオーストラリア国立大学に留学に来ている 20~25 歳(2000 年 4 月当時)の学生たちで男性, 女性それぞれ 6 名ずつだった。全員日本に生まれ 17 歳まで日本で育ち教育をうけている。それぞれのペアにおいて会話の最初の 5 分間を取り除き, そこから 10 分間の会話(全部で 60 分間)を観察の対象とした。以下, これら例文の出典を, 会話ペア 1 からのデータは[会話 1], ペア 2 からのデータは[会話 2], などと示す。

また, 一部の例文はテレビトーク・ショー『徹子の部屋』からとっている。詳細は, 1995 年 6 月 15 日放送分(ゲスト: 土井善晴), 1995 年 6 月 16 日放送分(ゲスト: 毒蝮三太夫), 1995 年 6 月 19 日放送分(ゲスト: 森口博子), 2000 年 2 月 21 日放送分(ゲスト: 河原崎有稀)で, それぞれからの例文を [徹子 1], [徹子 2], [徹子 3], [徹子 4]と示す。

2. 対話における「けど節」の役割

「けど節」は、その「関連要素」が発話に現れているかどうか²、またそれが現れている場合、「けど節」の前に現れているか後に現れているかによって次の三つのパターンに分類することができる。(X, Y はそれぞれ特定の節を示す)

(a) 「X けど, Y」 (b) 「Y, X けど」 (c) 「X けど」

(a) は「けど節」が関連要素 (Y) に先行する場合で、(b) は関連要素が「けど節」に先行し、(c) は「けど節」が関連要素なしに現れる場合である。以下、それぞれのパターンにおいて「けど節」がどのような役割を果たしているかを考える。

まず「X けど, Y」のパターンであるが、ここで「けど節」は次にくる関連要素に先行し「前置き」として用いられる³。「けど節」が前置き表現として使われる典型的な場面としては、話の背景(例 (3)), 注釈(例 (4)), 身元紹介(例 (5)), 依頼(例 (6)), 勧誘(例 (7)), などがある。

(3) ミッドセメスターブレイクのあいだに旅行に行ったんだけど, そんなとき恐ろしい勢いで食べまくって... [会話 2]

(4) 私, オーストラリアの友だちあまりいないからよくわからないんだけど, ブレックファストをブレッキーとかいうんでしょ? [会話 3]

(5) 私, 田中と申しますけど, 中村さんいらっしゃいますでしょうか。

(6) お願いがあるんですけど, この本を貸していただけませんか。

(7) A: きのう, 映画の切符を 2 枚買ったんだけど.

B: 映画?

A: 一緒に行かない?

例えば (3) は、話し手が今ダイエットをしている理由を説明している場面での発話で、大学の休みに友人と旅行に行き、そこで盛んに食べた(それで太った)、というものである。「旅行に行った」ことが表現されている「けど節」は、話し手の、聞き手に伝えたい主たるメッセージ、「たくさん食べて太ったこと」の前置き的な、背景となる情報を提示している。「けど節」が次にくるメッセージに対して前置きとしての役割を果たしているのはその他の例においても同じである。

この前置き表現における「けど」の使用は場合によっては必須である。したがって、内容が前置きとしての役割が不明な時には「けど」がないと表現が不自然になるものが多い。

² 従来の「主節」「従属節」という名称は意味的にも主—従属の関係を暗示するところが多く、本稿では「主節」の代わりに、「けど」によって関連づけられるという意味で「関連要素」という名称を使う。

³ これは、先行研究でも、'background' (Nakayama & Ichihashi-Nakayama 1997), 'some more to come' (Ohori 1995), 「前置き」, 「前提」(森田 1980, 高橋 1993, 野田 1995)などと扱われている。

(8) ?私, オーストラリアの友だちあまりいないからよくわからないんだ。ブレックファストをブレッキークとかいうんでしょ?

例(8)は上記の(4)から「けど」を取り除いたものである。このように、もし「けど」が使われなかったら、「私〜よくわからないんだ」と「ブレック〜いうんでしょ?」の二つの要素は「前置き一本論」という関連性が弱まり、表現は全体として一貫性を失ってしまう。このように、「X けど, Y」における「けど節」は前置きとして、次にくる主たるメッセージを聞き手に無理なく理解させる上でコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしている。前置きなしに、いきなり本論に入ることは快適な対人関係を保つうえで不適切であろう。

次は「Y, X けど」のパターンであるが、この場合には「けど節」は先行する関連要素の内容を補う「補足」としての役割を持つ。

(9) イースターブレイクであの友だちの家に行ってメルボルンに、ま、メルボルンの近くなんですけど、ま、なんかその家で... [会話 5]

(10) こんな古いものをよく食べさすな、みたいな、そこちゃんとしたレストランだったんだけどね。 [会話 3]

(11) A: ずいぶんきれいなところで。

B: ええ、そうですね。あ、あの一、田舎ですけど。 [会話 6]

これらの例は、「けど」が、話し手がいったん何かについて発話を行った後、それに対して一定の修正(例(9)の場合)や評価(例(10)(11)の場合)を付け加える補足的な発言をマークしていることを示している。Chafe (1979, 1985) が書き言葉と話し言葉の違いとして指摘しているように、話し言葉の典型である対話では時間的な制約があるため、話し手はしばしば自分の発話の区切り後(例えば、上の(9)では「メルボルンに」が一つの区切り)、それを修正したり、足りない情報を補ったりする必要に迫られる。このように、挿入、補足的に用いられる「けど節」は、話し手が話を続けながら(すなわち相手にターンを渡さずに)、必要な情報を随時補うことができるという点で、会話において重要な役割を果たしている。

この場合でも、「前置き」の役割を持つ「X けど, Y」のパターンと同様、もし、補足的な発話が、内容的に補足としての役割が明確でない場合、例えば(11)から「けど」を取り除いてみた次の例のように、表現は関連要素とのつながりを失い全体として不自然なものになってしまう。

(12) A: ずいぶんきれいなところで。

B: ?ええ、そうですね。あ、あの一、田舎です。

以上、「X けど, Y」と「Y, X けど」のパターンにおける「けど節」の使い方を観察し、それぞれのパターンにおいて「けど節」は、「前置き」と「補足」としての役割を果たしていることを述べた。会話を進めていく上で話し手は当然、自分の発話を聞き手に十分理解してもらうため

これに後続すべき何らかの否定的な事柄であることは、日本語の母語話者にとっては明らかである。これは、敢えて否定的な事柄は明言しないという配慮からであるだろうが、ここで重要なのは、話し手の主メッセージ(明言されていない、何らかの否定的な事柄)が「けど節」の外にあり、「けど節」自体は話し手の主な意図ではないということである。

「X けど」のパターンの例をもう一つ見てみよう。次の例は、環境学が専攻である話し手が同じ大学で言語学を勉強している聞き手に向けた発話である。

(15) なんかに日本語の言語学はすごっていうのは聞いたんですけど。【会話 5】

ここでの話し手の意図は、文字通り「～ということ聞いた」ことを聞き手に伝えることではなく、聞き手から何かの関連情報を引き出すことである。「情報を引き出す」ための通常的手段といえば相手に質問することであろう。しかし、それが唯一の方法ではない。Pomerantz (1980) が指摘しているように、相手から情報を引き出すために自分の知っていることを述べる、my side telling というストラテジーも情報を引き出す手段としてよく使われる。(15) もこのストラテジーの一例で、実際、my side telling は「X けど」のパターンにおける「けど」の重要な用法の一つでもある。ここで、「けど節」がこのストラテジーによく用いられる動機を探ってみよう。まず、試しに(15)の発話から「けど」を取り除いてみると、

(16) なんかに日本語の言語学はすごっていうのは聞いたんです の。

となり、文法的には何ら問題がないものの、聞き手から情報を引き出そうとする話し手の意図を示すには不自然である。自分の知っている事実をそのまま述べることになり、相手に働きかけるという姿勢が明確に感じられない。そうかといって、

(17) なんかに日本語の言語学はすごっていうのは聞いたんですよ。

と、相手に働きかける終助詞「よ」を使っても、単に「～聞いた」ということを断定的に相手に訴えるような表現となり、相手から関連情報を提供してもらうための表現としてはあまり適していない。

これに対して(15)のように発話末に「けど」を使うと、すでに述べたように、主メッセージはこの発話の外にあることを示すことになり、話し手の言いたいことは「～聞いた」自体ではなく、

「～について聞いたが、それは正しいですか」

「～について聞いたが、あなたはもっと詳しいでしょう」

「～について聞いたが、それについて教えてくださいませんか」

などのようなものとして解釈を受けるのである。「けど」で終わる発話の機能についてはさまざま

な指摘があるが、中でも、Park (1997) の、「けど」には聞き手に「関連性を説明する示唆を与える」(to set up an accountability relevance point) という機能がある、という言及は注目に値する。これを言い換えると、すべてを明確に言語化するのではなく、暗示することによってヒントだけを与え、後は聞き手の推量に任せるということになる。はっきり言わずに暗示するにとどまるため、上述のようなさまざまな解釈が可能になり、多様な解釈を許すというそのあいまいさが、時に「丁寧な」印象を与えるのだと思われる。(15)の例では、「～について知っていますか」と直接的に質問するよりも、「～についてももし知っていたら…」という暗示的な発話で、聞き手への負担を軽くすることができるという意味でも丁寧ということになり、このような「けど」は「やわらげ」の機能を持つということになる。

以上をまとめると、対話における「けど」の役割は、それがマークしている「けど節」自体は主たるメッセージではなく、話し手の主たる意図またはメッセージは「けど節」の外にあることを示す、ということになる。要するに、「けど節」は常に話し手の主たるメッセージの周辺にあって、前もって聞き手に背景となる情報を与えたり(「X けど, Y」パターン)、メッセージを追加または修正したり(「Y, X けど」パターン)、メッセージについてのヒントを与えたり(「X けど」パターン)するのである。特に「X けど」のパターンにおいては、「けど節」だけを述べることで主たるメッセージへの多様な解釈を許し、表現全体としてあいまいさを残すことになるが、これが表現をやわらげる効果を生み出す。「けど」のこの特性は、5., 6. で述べる、「けど」の「んだ」との共起関係を理解する上で重要である。次の4. では「んだ」の機能について考える。

4. 「んだ」の機能と効果

「んだ」は日本語の会話において最も頻繁に使われる表現の一つであり、その機能に関する研究も数多くある。そのうち、「んだ」の機能を「説明の提供」として捉える見方がある(例えば、Alfonso 1966, 久野 1973, 山口 1975, など)。

(18) きのう遅くまで勉強をしました。

(19) きのう遅くまで勉強をしたんです。

例えば、「んだ」が使われていない(18)は、「きのう遅くまで勉強した」という事柄を淡々と描写しているのに対して、「んだ」のある(19)は何かの出来事または状況(例えば、話し手の目が赤く充血している)に関する理由を直接的に説明する表現として用いられる。

しかし、「説明の提供」として捉えられない場合が多いことも指摘されている。例えば、国広(1984)は Alfonso (1966) の次の例において、

(20) (繁華街をお客さんを案内しながら言う場面で)

ここはとてものにぎやかなんです。

お客さんも街がにぎやかであることは見れば分かるわけで、このような「んだ」の使用を現状に対する説明として捉えることはできないとし、「んだ」は、その表現が、話し手と聞き手両方が既に知っている何らかのでき事または状況と関連があることを示すという、三上(1953)の「既成関連命題説」を支持している。紙面の制約上、先行研究に関する詳細は省略するが⁴、以下、本稿の「んだ+けど」の分析と直接関係のある Maynard (1992) におけるいくつかの指摘について考える。

Maynard (1992) は「んだ」の使用を認知過程の観点から分析している。Maynard (1992) は、現象をありのまま描写する現象文⁵では「んだ」の表現が用いられないことを指摘し、結局「んだ」の使用は命題に関して話し手が意識的な判断 (conscious judgment) を下した場合に限られるとする。この分析によると、上記の、「んだ」に関わる二つの出来事の関係はこの意識的な判断という過程を経て結び付けられ、それが時には与えられた状況への説明となったり、既に知っている事柄への確認または驚きの表現となったりするということになる。

なお、Maynard (1992) は、「んだ」が「の(ん)+だ」からなっていることに焦点を当て、この構造がもたらす、「の」による表現の名詞化、「だ」による判断文化という二重的性質に注目している。名詞化により表現は客観性を持つようになるが、他方では話し手の断定的なムードを担う「だ」が後続することが、「んだ」に表される全体的な話し手の発話態度に影響を与える。つまり、物事に対する話し手の主観的な判断を示す「だ」で終わることによって、「んだ」の表現は断定的なムードが強くなり、その結果、話し手の気持ちを前面に出す効果が生み出されるのである。

(21) (大学の寮の生活について話し合っている場面で)

A: じゃ、自炊をなさってるんですね。

B: いえ、全然してないんです。 [会話 6]

(22) (留学から間もなく日本に帰国するという状況で)

A: それで帰って1年間で卒論書いて卒業するんだ。

B: あ、ほんとうに。 [会話 2]

上記の例(21)で、Bの表現が「んだ」で終わることで、その断定的なムードが強く出ており、話し手の否定する気持ちが強く表されている。(22)でも、表現に関わっている話し手の断定的

⁴ 「んだ」の機能に関する研究には、説明提供説(例えば、Alfonso 1966, 久野 1973, 山口 1975)、既知情報説(例えば、マグロイン 1984)、既成関連命題説(例えば、三上 1972, 田中 1979, 国広 1984, 松岡 1987)、などがある。「んだ」の先行研究は、国広(1984)、田野村(1990)、メイナード(1997)などに詳しい。

⁵ Maynard (1992) は、現象をそのまま描写し現象と描写する表現の間には何の隔たりもない文、という三尾(1948)における現象文の概念を引用している。

なムードが強調されている。これは、それぞれにおいて「んだ」がない表現「いえ、全然していません」「それで～卒業する」と比べてみても分かるように、話し手の発話態度を前面に出す「んだ」の特性に起因するものであることは言うまでもない。

Maynard (1992) におけるもう一つの興味深い指摘は、相手とのやりとりが重要視されるコンテキストでは、「んだ」の使用は、「の(ん)+だ」の「の」でマークされる名詞節の内容に、「私が(意識的に)言いたいことは」または「私が(意識的に)述べたいことは」という話し手の発話態度を加えるということである。この点は5.での「んだ+けど」の分析と直接関連しており、そこで詳しく述べる。

以上、「んだ」について考えてきた。「んだ」と「けど」の共起関係を分析する上で重要なポイントをあげると、次のようになる。

- (23) 「んだ」は、
- a. 現象をそのまま描写することに重点が置かれている現象文には用いられない。
 - b. 何かの出来事、状況との関連で、それへの説明や確認などを表す。
 - c. 話し手の発話態度を前面に出し、話し手の気持ちや断定的なムードを強調する。
 - d. 「私が(意識的に)言いたいことは」という話し手の発話態度を加える。

5. 共起関係: 「X けど, Y」「Y, X けど」のパターンを中心に

ここではまず、「んだ」が前置きとしての「けど節」に現れた場合(「X けど, Y」パターン)の「んだ+けど」の共起関係について考える。結論を先に言うと、この場合「んだ」が「けど」とよく一緒に使われるのは、「んだ」の持つ、「私が(意識的に)言いたいことは」という話し手の発話態度を示す働きに起因するものと考えられる。このような発話態度は、聞き手のいる対話において「私があなたに言いたいことは」ということであり、これは結局、「ちょっと聞いて」という、聞き手の注意を喚起する効果を生み出すのである。次の例を見てみよう。

(24) ミッドセメスターブレイクのあいだに旅行に行ったんだけど, そんなとき恐ろしい勢いで食べまくって... [会話2]

(25) さて, そのお名前なんですけども, 前は伊藤栄子さんて... [徹子4]

(24) と (25) それぞれにおいて「んだ」によってマークされる内容、「ミッド～行った」、または「お名前について」というのが「私が意識的に言いたいこと」であるが、これが「けど」に後続されることによって、「これと関連してさらに言いたいことがあるから、ちょっと聞いて」という話し手の意図が感じられる。つまり、「んだ+けど」の組み合わせは全体として「私が言いたいことは → ちょっと聞いて」という発話態度を示し、これによって聞き手の注意を喚起する働き

をすることになる。前置きの一つの重要な機能が聞き手の理解を助けることだということを考えると、このような発話態度を示す「んだ」の前置きにおける頻繁な使用は自然なもののように思われる。

このように、前置きの表現での「んだ」の使用は、「私が(意識的に)言いたいことは→ちょっと聞いて」という発話態度を強めるかどうかという問題と関連しており、こういう発話態度が強く要求される場面ほど、「んだ」の使用は義務的になる。次はそのような例である。

- (26) A: 願いがあるんですけど(?ありますけど).
 B: はい、なんでしょう.
- (27) (クラスが終わって学生たちが部屋を出ていく場面で、教師が学生 X に)
 教師: ちょっと、聞きたいことがあるんですけど(?あるけど)、残ってくれる?
 X: はい、わかりました.
- (28) A: きのう、映画の切符を2枚買ったんですけど(?買ったけど).
 B: 映画?
 A: 一緒に行かない?

これらの例はいずれも相手からの反応が欠かせない場面での前置きの表現である。このような場面では当然聞き手の注意を引きつけることが要求される。これらの例で「んだ」がないと不自然になるのは、前述のように「んだ」は相手の注意を引きつける効果を持っており、これなしには表現は相手への一方的な通知、または単なる描写となり、相手の関与を期待する表現としては不適切になるためだと考えられる。このように、前置きにおける「んだ+けど」は、聞き手の注意を引きつけて相手からの反応を促す上で重要な役割を果たしているのであるが、相手からの反応をそれほど必要としない場面では、「んだ」の使用は必ずしも必須ではない。

- (29) (テレビのトークショーで当日のゲストを紹介する場面で)
 今日のお客様はお料理の先生でいらっしゃいますけど、この方のお父様はもとの先生でいらっしゃいました。 [徹子1]
- (30) ずっと堅実なんだったってみんなに思われているけど、ハワイなんか行った時、わたしだって使うのよーって思って使っちゃったりする時あるんですって? [徹子3]

これらの例において、「けど節」が次に来るメッセージに関する背景となる情報を示していることは他に「んだ」がある場合と変りないが、これらの例では、他の「んだ」が使われた場合に比べ、相手の関与を促す気持ちがあり感じられない。(29)の表現は当日のゲストを紹介する上で関連情報を与えているものであるが、ここでの聞き手は一般の視聴者であり、聞き手の関与が必ずしも必要な場面とは言いがたい。聞き手の関与がそれほど必要でないという点では(30)の場合でも同じであり、「ずっと～思われている」という事柄を述べる上で、話し手がとりわけ相手

の関与を促しているような感じはしない。ここで、もし「んだ」が使われたら、「今日のお客様はお料理の先生でいらっしゃるんですけど、この方～」などと、「けど節」の内容を強調し、かつ相手の関与を促す気持ちが強まることになる。

補足として使われる「けど節」の場合(「Y, X けど」パターン)でも基本的には同じで、次の例(31)(32)と(33)(34)それぞれに見られるように、「んだ」が使われるものもあれば使われないものもある。

- (31) 去年はもうずっとキャンベラに4ヶ月いて、4ヶ月、5ヶ月かな、それでインドネシアに脱出して、ま、ち、調査のためなんですけどー、で、あ、魚がうまいみたいな感じで、えーと... [会話3]
- (32) (シドニーの電車路線について説明する場面で)
で、セントラル駅から黄色い線に乗るの。ウエスタンラインっていうんだけどね。 [会話4]
- (33) A: ずいぶんきれいなところで。
B: ええ、そうですね。あ、あの一、田舎ですけど。 [会話6]
- (34) あの一龍泉寺というね一、浅草の方ですけど、で、そこの一いや、俺はね、品川で生まれたから... [徹子2]

「んだ」の使われている(31)(32)では、聞き手の注意を喚起し、「けど節」の内容を強調しようとする発話態度が感じられる。これに対して、「んだ」のない(33)(34)では、「けど節」の内容を述べる上で、そういう発話態度はあまり感じられない。

6. 共起関係: [X けど] のパターンを中心に

この節では、関連要素が現れていない「けど節」の場合(「X けど」パターン)の「んだ+けど」の共起関係について分析する。まず、もう一度確認しておきたいことは、ここで「けど」が使われないと、表現は「一だ」で終わるということである。4.で述べたように、「んだ」で表現が終わった場合、話し手の発話態度が前面に出て話し手の気持ちや断定的なムードが強まる。これを念頭に置き、次の例を見てみよう。

- (35) それで、なんか日本人の女の人は料理が作れないって勝手に思ってるバカがいて、何考えてるんだろうとか思ったんだけど。 [会話2]

これは、話し手が以前出会ったある外国人男性の、ステレオタイプなものの考え方を非難する場面での発話である。この発話は、下降イントネーションとなっており、話し手はここで発話を終了している。ここでもし、「けど」が使われず「んだ」がそのまま発話末に残ると、断定のムードが強まり非難または憤慨の気持ちが強く表れ、話し手の意見を主張する調子が強まってしまう。

- (36) それで、なんか日本人の女の人は料理が作れないって勝手に思ってるバカがいて、何考えてるんだ

ろうとか思ったんだ。

この表現は、もちろん、これ自体このコンテキストで可能なものである。しかし、もし話し手がここで断定的に言い切らず自分の意見や主張の度合いをやわらげる必要があると判断した場合には、「けど」の使用は重要である。3. で、「けど」は非焦点化という機能を持ち、「X けど」パターンにおいてはその関連要素をはっきり示さずただ暗示するにとどめることで多様な解釈を許すあいまいなところがあることを述べた。そのあいまいさが「んだ」における断定的なムードを弱めることになる。特に上記の例(35)において、発話の内容が人種に関することであり「バカ」というののしり言葉を含むという微妙なものであることを考慮すると、「んだ」に後続する「けど」の使用動機が明らかになる。要するに、「X けど」パターンにおける「んだ+けど」の組み合わせの頻繁な使用の動機は、「んだ」をそのまま発話末に残すことを避けることで、断定のムードによってもたらされる感情や気持ちが前面に出るのを弱めるためということになる⁶。

これを検証するため、次の例を見てみよう。

(37) フェナーもうちょっと近ければよかったんだけど。 [会話 1]

上の例で、フェナーという寮に住んでいる話し手は、学外にあるその寮がキャンパスから遠くて残念だという気持ちを表現している。ここで使われている「～ば、～んだけど」の構文は反事実条件文といわれるもので、現状に対する不満や残念な気持ちを表す場合に用いられる(砂川他 1998)。この構文を用いてこういった話し手の気持ちを表す上で「んだ」の役割は重要で、試しに上の表現から「んだ」を取り除いてみると、このコンテキストでは発話が不自然になってしまう。

(38) ?フェナーもうちょっと近ければよかったけど。

この不自然さは、ここでの話し手の意図は自分の意識的な判断の中で話し手の感情や気持ち(この場合は不満)を表すことにあるが、このような働きを担う「んだ」なしでは現象をそのまま描写することになり、話し手の感情や気持ちが十分出ないことで、「～ば、～んだけど」の構文で期待されるムードの表れ方と一致しないためだと言えよう。

この場合、表現が必須の「んだ」で終わることも、次に見るように、非文法的ではない。

⁶ 一般に日本語の会話において表現が「—だ」で終わるのを避ける傾向があることは Maynard (1992) などでも指摘している。本稿のデータでもこの傾向が強く見られ、表現が「んだ」で終わる場合は全体の 6.32% に過ぎなかった。参考としてもう少し詳しく述べると、本研究の 60 分間のデータで「んだ」の使用頻度数は全部で 174 で、具体的には次のような現れ方をしていたが、「んだ+けど」の組み合わせが断然多かった。

総頻度数: 174 (100%)	んだ+けど: 73 (41.95%)	んです+か: 32 (18.39%)
んだ+よ: 32 (18.39%)	んだ Ø: 11 (6.32%)	んだ+よね: 10 (5.75%)
んだ+ね: 8 (4.60%)	その他(んだ+と/って/もん/っけ/たら): 8 (4.60%)	

(39) フェナーもうちょっと近ければよかったんだ。

しかし、ここで「けど」が後続しないと、上記で指摘したように、話し手の断定的なムードだけが前面に出され、表現は一方的で強い主張として解釈される。このような断定的なムードをやわらげるのに「けど」が重要な役割を果たしていることは言うまでもない。

ここで、「んだ+けど」の効果を、さらに「のに」との比較で検討してみよう。「～ば、～んだけど」と同様、「～ば、～のに」も後悔や不満を表す場合に用いられる反事実条件文の一種である(砂川他 1998)。もし、上記の発話に「のに」が使われたらどうなるのだろうか。

(40) フェナーもうちょっと近ければよかったのに。

まず、これを「んだけど」が使われた場合の(37)に比べると、話し手の不満がいくぶん強くかつ直線的に表れているように感じられる。性質が似ているところがあるということで「のに」と「けど」はよく比較されるが、次に見るように、本稿のデータに限って言えば、実際の会話において「けど」の使用頻度は「のに」のそれを遥かに上回る。

表1 「けど」と「のに」の使用頻度(回数)

	発話中	発話末	合計
けど	86	39	125
のに	5	3	8

これにはいろいろな理由があると思われるが、一つの重要な理由として考えられるのは、「けど」がもたらすやわらげの効果があげられよう。例えば、上記の非難したり不満を表す場合の表現において、もし「んだ」や「のに」が使われないと、(38)で検証したように話し手の感情や気持ちの現れ方が弱すぎて、このようなコンテキストでは不自然なものになってしまう。といって、「のに」を使うと、(40)で見たように今度は表現があまりにも直線的で不満の表れ方が強すぎてしまう。これに対して、「んだ+けど」の組み合わせは、一方では話し手の感情や気持ちを一通り表し、もう一方ではそれがあまり強すぎないように抑える二重的な働きを持つ。話し手が自分の感情や気持ちをどの程度表すかということは、状況によってさまざまに異なると思われるが、この「んだけど」が持つ二重的な働きは、状況に応じて過不足なく感情を適切に表現することができるという点で、話し手にとって便利なのだろう。こういった「んだけど」が生み出す二重的な働きが、相手との会話を円滑に行うための重要な戦略として好まれ、特に対話において頻繁に用いられているのだと言えよう。

7. おわりに

以上、「んだ+けど」の組み合わせの背景や動機を考察した。「けど節」は常に話し手の主たるメッセージの周辺にあって、前もって聞き手に主メッセージの背景となる情報を与えたり(「X けど, Y」パターン)、メッセージを追加または修正したり(「Y, X けど」パターン)、主メッセージについてのヒントを与えたり(「X けど」パターン)する。特に、「X けど」のパターンでは、「けど節」だけを述べることで主たるメッセージへの多様な解釈を許し、表現全体としてあいまいさを残すことになるが、これが表現をやわらげる効果を生み出す。

「んだ」の使用は、相手とのやりとりが重要視されるコンテクストでは、「私が(意識的に)言いたいことは」という発話態度を加える。この発話態度は、「けど」と組み合わせられることによって「これと関連してさらに言いたいことがあるから、ちょっと聞いて」という聞き手の注意を喚起する効果を生み出す。この効果は話し手の意図やメッセージを無理なく理解してもらう上で重要な役割を果たすのである。

また、「んだ」が発話末に現れた場合、「—だ」の持つ断定的なムードにより話し手の気持ちや感情を強調することになるが、これがやわらげの効果を持つ「けど」に後続されることで「んだ+けど」の組み合わせは全体として二重的な働きを持つ。つまり、一方では話し手の表したい感情や気持ちを一通り表し、もう一方ではそれがあまり強く直線的にならないようにやわらげる。この二重的な働きにより話し手は自分の気持ちを過不足なく適切に表すことができるのである。

このように、「んだ+けど」の組み合わせは、それぞれの表現が持っている役割や働きがうまく結合し、会話を効果的にかつ円滑に行うための重要なストラテジーとして好まれているのだと考えられる。

謝 辞

本研究は Australian National University, Faculties Research Grants Scheme (Project No. F00088) による研究成果の一部である。

参 考 文 献

- 今尾ゆき子(1994) 「「ケレド」と「ノニ」の談話機能」『日本語教育論集 世界の日本語教育』4: 147-163, 国際交流基金日本語国際センター。
 岩澤治美(1985) 「逆接の接続詞の用法」『日本語教育』56: 39-50。
 内田安伊子(2001) 「「けど」で終わる文についての一考察: 談話機能の視点から」『日本語教育』109: 40-49。
 国広哲弥(1984) 「『のだ』の意義素覚え書」『東京大学言語学論集 '84』, 東京大学文学部言語学研究室。
 久野 暉(1973) 『日本文法研究』, 大修館書店。

- 白川博之 (1996) 「「けど」で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』第6号.
- 砂川有里子 他 (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』, くろしお出版.
- 高橋太郎 (1993) 「省略によってできた述語形式」『日本語学』12(10): 18-26.
- 田中 望 (1979) 「日常言語における『説明』について」『日本語と日本語教育』第8号, 慶応義塾大学国際センター.
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I: 「のだ」の意味と用法』, 和泉書院.
- 野田春美 (1995) 「ガとノダガ: 前置きの表現」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下)複文・連文編』, 565-572, くろしお出版.
- マグロイン・H・直美 (1984) 「談話・文章における「のです」の機能」『言語』13(1): 254-260.
- 松岡 弘 (1987) 「「のだ」の文・「わけど」の文に関する一考察」『言語文化』第24巻, 一橋大学語学研究室.
- 三尾 砂 (1948) 『国語法文章論』, 三省堂.
- 三上 章 (1972 [1953]) 『現代語法序説』, くろしお出版.
- メイナード・H・直美 (1997) 『談話分析の可能性』, くろしお出版.
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語』2, 角川書店.
- 山口佳也 (1975) 「『のだ』の文について」『国文学研究』第56号, 早稲田大学国文学会.
- 渡部 学 (1995) 「けど類とノニ——逆接の接続助詞」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下)複文・連文編』, 557-564, くろしお出版.
- Alfonso, A. 1966. *Japanese Language Patterns*. Tokyo: Sophia University.
- Chafe, W. 1979. The flow of thought and the flow of language. In T. Givon (ed.), *Discourse and Syntax*, 159-81. New York: Academic Press.
- . 1985. Linguistic differences produced by differences between speaking and writing. In D. Olson, N. Torrance, and A. Hildyard (eds.), *Literacy, Language, and Learning*, 105-23. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dik, S. *et al.* 1980. On the typology of focus phenomena. In T. Hoekstra, H. van der Hulst, and M. Moortgat (eds.), *Perspectives on functional grammar*, 41-74. Dordrecht: Foris.
- Itani, R. 1996. *Semantics and pragmatics of hedges in English and Japanese*. Tokyo: Hitsuji Shoboo.
- Maynard, S. K. 1992. Cognitive and pragmatic messages of a syntactic choice: The case of the Japanese commentary predicate *n(o)da*. *Text* 12(4): 563-613.
- Mori, J. 1996. *Negotiating agreement and disagreement: The use of connective expressions in Japanese conversations*. Unpublished Ph.D. dissertation. University of Wisconsin-Madison.
- Nakayama, T. and K. Ichihashi-Nakayama. 1997. Japanese *kedo*: Discourse genre and grammaticization. *Japanese/Korean Linguistics* 6: 607-18.
- Ohori, T. 1995. Remarks on suspended clauses: A contribution to Japanese phraseology. In M. Shibatani and S. Thompson (eds.), *Essays in Semantics and Pragmatics*, 201-18. Amsterdam: John Benjamins.
- Park, Y. 1997. *A cross-linguistic study of the use of contrastive connectives in English, Korean, and Japanese conversation*. Unpublished Ph.D. dissertation. UCLA.
- Pomerantz, A. 1980. Telling my side: "Limited access" as a "fishing device." *Sociological Inquiry* 50: 186-98.